

周りのことも考えよう

校長 相川 保 敏



4年に一度のサッカーの祭典、FIFA ワールドカップ・カタール大会が始まりました。FIFA ランク 24 位の日本はグループ E で、同 7 位のスペイン、同 11 位のドイツ、同 31 位のコスタリカと対戦しています。総当たり戦で上位 2 カ国が一次リーグを通過し、決勝トーナメントに進出できます。日本は初戦のドイツ戦で逆転勝利しましたが、次のコスタリカ戦では敗戦し、後がなくなってしまいました。最終のスペイン戦が注目されます。

前回 4 年前のロシア大会では、日本は決勝トーナメントでベスト 8 をかけてベルギーと戦いました。強豪と言われるベルギーに対して、アディショナルタイムに逆転負けを喫し 2 対 3 で敗れました。逆転負けで落胆しているはずの日本のサポーターですが、試合後、スタジアムに残された空きコップや容器をゴミ袋に回収して清掃する姿が世界中に放送されました。海外では空きコップや容器はそのままにしておくことが普通なので、美談として大々的に取り上げられました。こうした日本のサポーターの行為が他の国のサポーターにも影響を与え、複数の国にも広まっているそうです。次に利用する人やごみを片付ける人を思いやる気持ちが、他の国の人にも受け入れられたのだと思います。

さて、今月のめあては「周りのことも考えよう」です。このめあては、7・8月の「相手のことも考えよう」というめあてとつながっています。まずは自分の思い・考えを大事にすること。その上で、自分と直接関わる相手のことも考える。さらには自分たちの周りの人のことも考える、という考え方ができるようになることを「も」という言葉で意図しています。「自分」「相手」「周り」へと考えを広げていく際に必要なことは、他者の気持ちを咀嚼していけること、つまり「相手」や「周り」の人に自分を置き換えて考えていくこ

とです。しかしながら、置き換えて考えることは低学年と高学年では、発達段階の違いによって「考えられる」レベルが異なってくるので、それを育成していく大人のかかわり方も変わってきます。

小学校高学年の時期には、物事のある程度対象化して認識することができるようになり、対象との間に距離をおいた分析ができるようになります。そして自分のことも客観的にとらえられるようになってくるため、他者の視点に対する理解や自他の尊重の意識や他者への思いやりなどをこの時期に伸長させることが可能です。学校内外で周りのことも考え、行動していくように促していくことが大人の役割になります。

一方、小学校低学年の時期は一般的に、対象化したり、置き換えて考えたりできる段階に達していないため、考えるためのベースづくりを行う必要があります。つまり、他者の気持ちを咀嚼して行動していくと言うよりも、人として行ってはならないことについての知識、集団や社会のルールを守る態度など、善悪の判断や規範意識の基礎の形成を第一にしていくことが必要になります。時折、学校に乗り物のマナーやルールについての苦情をいただくことがあります。その多くは低学年です。したがって、高学年が望ましい姿を低学年に示していくことや大人が善悪の判断を教えること、手本を示すことが大切になってくるわけです。

「周りのことも考える」ことは、多様な人々と協働しながら様々な課題を乗り越え、持続可能な社会を創りあげていく上で必要とされる力です。日本のサポーターが示したように、他の国にもよい影響を与えられるような言動を身に付け、世界で活躍できる人材に成長して欲しいと願います。そのために、学校と家庭が連携し「周りのことも考える」意識付けを継続して取り組んでいきたいと思います。ご協力の程、お願いいたします。